

いごいのみぎわ

天路歷程 ジョン・パニヤン

第21話

2022年4月10日～4月16日 各家庭でのディボーション用テキスト

基督者 おや、どうしたというのです。

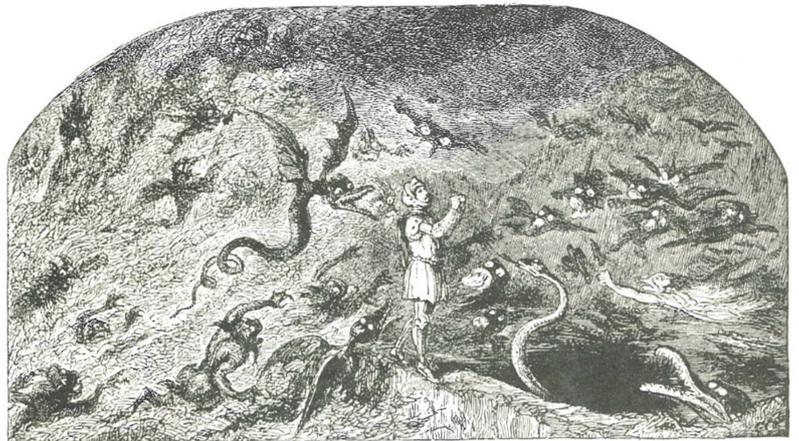
兩人 どうしたのなんのって。いや、私たちもあなたのようにこの道を進んで行って、思いきって行けるところまで行ったのです。実際危うく帰れないほどでした。もう少し先まで進んでいたら、ここへ戻ってあなたに模様を知らせることはできなかったでしょう。

基督者 ところで、どんなものに出会ったのですか。

兩人 いや、すんでのことに死の陰の谷に入るところだったのですが、【詩44:19、詩107:10】運よく前方を見て危険に近づかないうちにそれと分かったのです。

基督者 それにしても何か見えたのですか。

兩人 見えたって。いや、もちろんその谷ですよ。そこはピッチのように真っ暗で、地獄の妖怪やサテュロス（半獣神）や火龍が見えました。【イザ13:21】その谷ではまた絶えずほえる声やわめく声が聞こえましたが、それは言い尽せぬみじめさにあって、苦悩と足かせに縛られて坐っている人々の声のようでした。また火の上には意気阻喪させるような混乱の雲がかかっていました。【ヨブ3:5、10:22】死神もその上に絶えず翼を広げているのです。一言で言えば、それはまったく無秩序でどこからどこまで恐ろしいものでした。



死の陰の谷

基督者 あなた方が言われたところでは、この道が私の望みの港へ行く道ではないとは、まだ分かりませんが。【エレ2:6】

兩人 それをお前さんのゆく道とするがよいさ。私たちは自分の道として選びはしないね。

かくて彼らは別れ、基督者は自分の道を進んだ。しかし襲撃されはしないかと気づかって、やはり抜き身を手に引き下げたままであった。

それから私が夢で見ていると、この谷が広がる右手に非常に深いみぞがあった。【詩69:14】すべての時代に盲人が盲人の手引きをして陥り、もろ共にあえなく滅んだのはこのみぞであった。さらに見よ、左手には非常に危険な沼があって、善人でもその中に落ちたが最後足の立つ底を見つけることはできない。この沼へダビデ王も一度落ちたが、もし彼を引き出し得る主がなかったら、確かにそこで窒息した

ことであろう。

通路はまたここで極めて狭くなっていたので、さすがの基督者も一層苦しい目にあった。暗がりでは一方の側のみぞを避けようとするれば、他方の沼に転げ込みそうになるし、また沼をのがれようとするれば、非常に気をつけなければ、すぐにもみぞに落ち込みそうであったからである。このようにして進んで行ったが、私はここで彼がひどくため息をするのを聞いた。右に述べた危険のほか、その道路は非常に暗かったので、彼が進もうとして足をあげるとき、次にはどこに、またどんなものの上に足をおくのか分からないことがたびたびあったからである。

この谷の真中ほどに地獄の口があるのを見たが、それもまた道のすぐ側にあった。さてこれからどうしたらよいであろうと基督者は考えた。時おり焰と煙とが、火花と恐ろしい音を発して（これらは以前のアポルオンのようには基督者の剣を何とも思わないものだった）、非常におびただしく出てくるので、彼は止むを得ず剣を鞘におさめて、「さまざまの祈り」というもう一つの武器を取った。**【エペ 6:18】**かくて彼は私に聞こえる所で叫んだ、「主よ、どうぞわたしをお救いください」。

【詩 116:4】このようにして彼は長い間進んで行ったが、焰はなおも彼に届きそうであった。彼はまた悲しそうな声と右往左往する音を聞いたので、時として自分は八裂きにされるか、街路の泥のように踏みつけられてしまうかと思った。数マイルにわたって絶えずこのような物すごい光景が見え、このような恐ろしい物音が聞こえた。とある場所に来て、そこで一隊の悪魔たちが彼に会いに来るのを聞いたように思った時、彼は立ちどまって、どうしたらよいかを考え始めた。時には引き返そうという気も幾分起こった。するとまたこの谷も半ば通り過ぎたかもしれないと考えたら、すでに幾多の危険を征服したことや、引き返す危険は前進するのよりずっと多いかもしれないと思い出しもした。それで進んで行こうと決心した。しかし悪魔たちはますます近づいて来るように思われた。彼らがほとんど彼に迫って来たとき、彼は物凄いい声をあげて叫んだ、「私は主なる神の大能のみわざを携えてゆこう」。**【詩 71:16】**すると彼らは退いてもうそれ以上ついて来なくなった。

一つ言い落としたくない事がある。かわいそうに今や基督者は余り狼狽して自分の声がかたくなってしまったことに私は気づいた。それを私は次のように見たのである。彼がちょうどその燃える穴の口に向かってやって来たとき、邪悪な者の一人が背後にまわって、そっと歩みより、ひどく神を瀆す言葉をおびただしくささやいて暗示した。それをば彼は自分の心から出たものと本当に思い込んだのである。自分が以前あれほど愛したお方を今や罵ったのだと思うと、前に出会った何ものにも増して苦しい思いがした。しかもそうしないで済むならしなかったであろうのに、彼は耳をふさぐだけの思慮もなければ、これらの瀆し言はどこから来るかを知るだけの思慮もなかった。

このようにやるせない思いで、基督者は大分長い間旅をしてゆくうちに、前方を歩いている一人の人の声を聞いたように思った。「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れませんが」。**【詩 23:4】**

【ジョン・バニヤン 天路歷程 正篇 より】